



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.271
2026.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第8回 ◆ 馬渡埴輪製作遺跡粘土採掘坑への信念 ◆

遺跡調査は、1965(昭和40)年8月のA地区傾斜面から9基の登り窯を検出した調査を嚆矢とする。

昭和41年の3月A地区の南東方約70m、谷津の対岸B地区調査は、2基の登り窯と近接して工房址1を検出する。調査終了後に、東側団地造成中の地表削土工事に伴い粘土採掘場を確認し、窯跡以外の窯業にかかる遺構が存在することを予期できた。

昭和41年8月に行われたA地区2次調査(通算3次)は登り窯の北側台地に東西50m、南北30mにトレンチを入れ、多くの遺構が検出され、全面調査となる。竈付属の長方形竪穴(住居址1)、埴輪製作の粘土採掘用不整形の竪穴状遺構10カ所を検出した。住居跡は窯4に隣接して住居址1が、工房址は窯跡の北側平坦地に立地する。粘土採掘坑は西半分集中して検出され、不整形のものも多く、土坑覆土中から完形の土師式土器が15個体出土した遺構や大型の埴輪片が残存された遺構も存在した。このような遺構内からの遺物出土状態は調査団を困惑させる。工房址は長方形の竪穴で床面に粘土塊を置くものが多い。西側は不整形の粘土採掘坑を埋め戻し、床面を作出した工房址が密集する。調査は西側にトレンチを延長し、調査区南西隅に竈を持つ第2住居址の一部を検出した。

昭和42年3月、B地区の対岸C地区の調査(通算4次)は窯跡3基・工房址2基を調査した。1・2号窯は同一地点に重複して築かれ、C-2号窯の窯底の下層にB-2号窯の焼土層が確認された。B・C地区の調査は、水田下に残存しており、休耕中の3月に実施し調査団は地権者の耕作時期を決めている。

昭和42年8月のA地区3次調査(通算5次)は、調査区東側は4次調査に続き粘土採掘坑が検出され、接続されて大型の不整形竪穴に膨らむ。

5次調査はA地区の範囲が台地南側の全面調査となりしかも粘土を採掘した遺構が検出されるなど、馬渡遺跡の7次にわたる調査のなかで重要な調査であった。埴輪製作に最も必要とした原料の粘土採掘坑の遺構確認の調査ではなかったか。

『日本考古学年報20 昭和42年度 日本考古学協会編纂 昭和47年5月発行』(以下同書) 第I部「考古学会の趨勢」は斎藤忠により、「古墳時代では…茨城県馬渡埴輪窯址や工房址の調査など見るべきものがあつた。…」同書「I 日本考古学5 古墳時代」では編集部により「埴輪の発掘が各地でその例があげられているが、茨城県勝田市では、埴輪工房址と材料の採掘場が発掘された明大によるこの調査では埴輪生産の実態研明が行われ成果をあげた」、さらに同書「III 発掘および調査 古墳時代」茨城県・馬渡埴輪窯址(第4次)、調査概要の説明は「…C地点窯址の北側平坦面には、A地点、B地点と同様に、方形プランを有する竪穴遺構の存在が認められ、その周辺にやはり埴輪片や白色粘土塊の存在することも分かった。これの調査は次期に託すこととした。」と見える。その下段には、小林三郎により、茨城県・馬渡埴輪窯地(第5次)として、昭和42年8月5日～8月30日、調査概要は「第3次調査によって発見された、A地点埴輪工房址群に隣接部分の調査を実施した。今次調査は、A地点工房址群の範囲を確認する意味で行ったが、あらた

にカマド付属の長方形竪穴1基と、埴輪製作用粘土採取のための竪穴状遺構10ヶ所を発見した。発見した1基の工房址(住居址)は、前年度調査の際のトレンチによって確認されていたものであり、今次の調査によって確認したものである。この工房址は、しかも、すでに粘土採用の竪坑を廃棄したのちにこれを埋め戻しその上に床面を備えているものであつた。…」とある。さらに「…10カ所にのぼる粘土採取用竪坑は、形態や規模がそれぞれまちまちであるが、いずれも断面が袋状を呈するものであつて、あたかも横掘りによる粘土採掘を思わせる。…遺構群はさらに北方へ続いて伸びており次回調査を実現する必要がある。」と結ばれる。

昭和43年3月には、A地区(通算6次)北側に幅1mのトレンチを4本設定し、6号窯から56m離れて工房址1を確認した。さらに北側では5次調査で確認した粘土採掘坑16が地表面の窪地と接することを確認する。

昭和43年3月には、C地区の遺構確認調査をおこない7本のトレンチを設定して実施、未使用の3号窯尻と2基の工房址を調査して終了した。

勝田市教育委員会は、昭和47年3月30日付で「勝田市馬渡埴輪製作址」(市教委本)として、報告書を発行している。執筆者は大塚初重・小林三郎・川崎純徳である。報告書には、第1次調査から第7次調査の年月日・地点名が記載された後に

「…以上のごとく昭和40年度から43年度にいたる4年間に前後7回におよぶ発掘調査をおこない重要な成果をあげることができた。調査日数は合計115日に達成し、調査人員は一日平均15名であった。調査費用は明治大学と勝田市教育委員会の両者が分担したが、昭和41年3月と8月には計25万円の補助金が茨城県教育委員会より支出された。この4年間に約調査によって出土した埴輪などの資料は極めて多量で、昭和47年現在、なお整理が継続中である。本遺跡の学術調査報告書は明治大学考古学研究室報告として公刊の予定になっている。」とされ、調査終了時点で学術書とは別に市民に向け報告書を刊行している。極めて重要な記録が残されている。特に、国指定の前に茨城県から2年度にわたり補助金が出ているのは異例のことである。

筆者はこの調査には、毎回参加したが5次調査の記憶が曖昧であり、思い出せない。その原因は両報告書とも年度別ではなく、地点ごとにまとめて報告していることである。さらに詳細に当時の調査写真を回想してみると、第4次調査で設定したトレンチ内で確認した第2号住居址を、第5次調査で再調査していることに起因していた。しかも調査は第5次調査のみ参加者が他の調査より倍に近い人数であり、調査日も一月におよぶ日数が費やされていた。この調査は前半と後半の2班に分かれて調査を実施していた。調査団は、第5次調査に馬渡埴輪製作遺跡の台地上の遺構検出に命運を求めて調査していたことではなからうか。

馬渡遺跡は、昭和44年8月5日に史跡「馬渡埴輪製作遺跡」として面積14,874㎡が指定される。

(筆者註 今回は、馬渡埴輪製作遺跡の4年間にわたる調査の概観を記録した。そのため遺跡名 馬渡遺跡・馬渡埴輪製作遺跡、地区名 A地点・A地区 遺構名 粘土採掘坑・粘土採掘場)等々の表記がされている。)

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第8回) 鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第26回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第263回) 中谷俊哉 …3
■考古学者の書棚「虫塚紀行」 村山 卓 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第26回)

山本 暉久

26. 神奈川県職員としての考古学 その10

早稲田大学文学部非常勤講師として

逗子市池子遺跡群の調査に携わり始めた1989(平成元)年夏ころ、母校の早稲田大学第一文学部考古学専修の非常勤講師に翌年4月からなるようにと、恩師の櫻井清彦先生から依頼があった。高橋龍三郎先生が近畿大学へ転出することとなり、その後釜として、学部の講義1科目と考古学実習を非常勤として担当せよとのことであった。ただ、地方公務員であるため、通常の勤務に支障のない土曜日に出講する条件で引き受けることとなった。担当科目は、「考古学研究Ⅱ」(講義の内容は、「縄文時代文化研究の現状と課題」と「考古学実習」(2コマ連続)であった。前期・後期の通年科目であり、午前中に講義、午後に考古学実習を担当するという、いささかハードな時間配分であった。ただ、母校であることや自分が学んでいたところは、考古学の専攻課程もなかったことから比べると隔世の感があり、そうした依頼に感謝する気持ちをいだし、考古学を学ぶ学生達になにか役立つことがあろうかと思いきよく引き受けることとした。

こうして1990(平成2)年4月に着任して、1998(平成10)年3月まで、実に8年間と長く非常勤講師を務めることとなったのである。着任当初は、今の考古学研究室のある戸山キャンパスの建物(39号館)が建設中であり、研究室も戸山キャンパスの中庭にあったプレハブの2階建てで、講義や実習もその脇の平屋の建物で行うこととなった。考古学実習の前期は、戸山キャンパスの屋外で、平板測量、トランシット・レベルの操作などの測量実習を、後期は土器や石器などの実測やトレース実習を行うこととなった。考古学専攻への進学は2年生になってからで、本人の希望と、1年次の成績により選ばれて毎年15人前後の専攻生が受講することとなった。昨今はよくわからないが、当時、考古学は人気の専攻課程であり、専攻生となる倍率は高かった。自分が学生時代は、そのような考古学専門の授業も少なかったから、学生達は恵まれた環境であったように思う。ただ、今もそうだが、授業への出席は厳しい関係もあり、遺跡の発掘調査を学生時代に経験することが少なく、考古学の基本であるフィールドワークとしての遺跡発掘調査の訓練が不十分のままというのが問題であった。その点を改善する意味を含めて、大学独自の発掘調査実習が行われてきたのである。

非常勤講師となって、毎週土曜日の出講とは別に発掘調査実

習も担当することとなった。対象遺跡は、私に加わる以前から、高橋龍三郎先生が中心となって1987(昭和62)年から実施していた岩手県下閉伊郡田野畑村館石野I遺跡であった。岩手県沿岸北部、太平洋に面する三陸リアス式海岸の崖上に築かれた縄文時代中期から後期の大規模な遺跡である。縄文時代と思われる配石遺構の一部が地表に露出したまま遺っているという特異な遺跡として知られており、露出する配石のありかたから、秋田県鹿角市大湯環状列石に代表される縄文時代後期の環状列石の可能性が考えられることから、櫻井清彦教授を調査担当者として早稲田大学文学部考古学研究室が主体となって調査が行われており、1987(昭和62)年10~11月の第1次調査から1993(平成5)年8月の第8次にわたって発掘調査が実施されることとなった。調査の結果、この配石遺構は、立石を伴い、ゆるやかにS字状にカーブを描く列石遺構であることが明らかとなった(写真参照)。

私が調査に参加したのは、1990(平成2)年8~9月に実施した第5次調査からであった。大学の夏期休暇中の調査で、約2週間の調査期間であったが、この間は、自分の5日間の夏期休暇と有給休暇を消化して対応することとなった。田野畑村へ行くには、東京から東北新幹線を利用して盛岡まで行き、そこからJR山田線もしくはバスを利用して宮古駅前に着き、さらに三陸鉄道リアス式線に乗車し、ようやく田野畑駅に着くという、朝9時ころ東京駅を出ると、田野畑駅には午後3時くらいに着くという約8時間の長旅であった。海寄りにある駅からは、さらに車でリアス式海岸の断崖の急坂を登り、ようやく宿舎の農業会館(田野畑村 浜岩泉地区農業会館)に到着するのであった。

この宿舎は、体育館が併設されており、ほかに調理室と和室などからなり、参加した男子は私を含めて、体育館に平箱の上にマットをのせ、その上に布団を敷くという簡易ベッドで寝起きし、女子は、和室を利用した。食事は朝晩が自炊、昼は仕出し弁当であった。自炊は当番を決めて、担当者は早めに現場を切り上げて宿舎に戻り、夕飯の支度を行った。調査費用も少ないから、食事もおのずと簡素なものであったが、当番に当たった学生達の工夫でおいしい食事を摂ることができた。問題は、水周りで、水道はなく、宿舎近くの湧水を引き込んで貯水タンクに貯めるもので、お風呂は湯船につかることなく体を洗い流すことにしたものの、30人を超える大所帯だから、最後に入る者は、お湯がほとんどなくなることになってしまった。そんな苦労がなつかしく思い出されるが、調査終了後は毎週土曜日に整理作業を実施し、ようやく報告書を1997(平成9)年3月に刊行することができた。館石野I遺跡は、その後田野畑村により調査が継続され県指定史跡となっている。



▲館石野I遺跡 列石遺構 「館石野(特)遺跡発掘調査報告書」1997

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 263

淀城跡 ～京都府京都市伏見区

中谷 俊哉

遺跡の概要 私が今回紹介する遺跡は、就職1年目(2021年度)に調査を担当した淀城跡(伏見区淀池上町周辺)です。

淀城跡は、京都盆地南西部の、桂川・宇治川・木津川が合流する淀地域に位置します。現在の京阪淀駅周辺です。当地域は、平安京に近く、川を下れば西国へ抜けることができるため、古代から中世にかけて津や市が置かれ、交通の要衝として重視されました。また有事の際には拠点とされ、政治的にも重視されました。そのような場所に位置する淀城は、元和九年(1623)に松平定綱によって築かれた梯郭式の平城で、城内、城内町、城外町から構成されます。城内町には京街道が縦断し城外町は川をはさんだ対岸に展開します。城は、宝暦六年(1756)の落雷による天守焼失、慶応四年(1868)の鳥羽・伏見の戦いによる城内町等の焼失といった災禍を経て、明治四年(1871)に廃城となります。

淀城跡(遺跡範囲は城内と城内町)では、これまで多数の発掘調査が行われてきました。2026年3月現在、関連遺構が見つかった調査だけでも90近くあります。主な成果としては、宝暦六年(1756)の落雷によるとみられる火災痕跡が見つかった天守の調査、藩の米蔵の調査があります。また城内では門、櫓、柵形虎口、雁木とみられる遺構も確認されています。このほか、遺跡範囲の一部に城外町が含まれる淀水垂大下津町遺跡では、近年継続的な調査が行われており、築城時に大量の廃船を用いて護岸の整備を行うなど、城外町の様相が明らかになってきています。

2021年度調査の概要 調査地は、家老をはじめとする重臣の屋敷が置かれた東曲輪のなかでも、最も大きな屋敷敷が置かれた一筆の一画に当たります。この敷地は、江戸時代を通して家老屋敷で、明治時代以降は淀町長の長田桃蔵宅(ちなみに孫の谷川俊太郎は、1945年に本宅に疎開)、戦後は旅館、そして現在はJRAの寮となっており、調査は寮の建て替えに伴うものです。

調査では、江戸時代中期と後期の2時期の建物群が見つかりました。後期の建物群は、中期の建物群が廃絶してから、川砂による約80cmの敷地の嵩上げをしたのちに建てられています。規模や配置は中期の建物群と瓜二つです。きっと同じ建物群が再建されたのでしょう。2つの建物群にはその配置から、式台、玄関、書院とみられる建物があります。式台は間口2間で家老屋敷に相応しい規模です。考古学の成果から見ても家老屋敷であることはまず間違いありません。さらに、式台の外には通路があり、本丸の三鉄門の方向に続いています。これは家老屋敷の門が三鉄門と対面するという史料の記述と一致します。

京都ならではの発掘調査 ところで京都は、とにかく文献史料が豊富に残っています。ですから、それと対比しながら発掘調査成果を評価していくことができる場合が多々あります。これは京都での発掘調査における醍醐味の一つではないかと思います。

今回の調査でも、調査前に史料や絵

図の搜索を行い、江戸時代中期の家老屋敷の居住者が八太三左衛門であることが判明していました。後期の家老屋敷については、史料のみでは特定しかねていましたが、その後の発掘調査で、検出した地面や書院の礎石に被熱痕跡が見つかり、これが鳥羽・伏見の戦い(1868年)による火災痕跡であると考えられたため、屋敷が焼失したことが史料上確認できる八太監物か稲葉七郎兵衛の屋敷であることが判明しました。しかし、どちらの家老の屋敷か特定することができないまま、発掘調査は終盤にさしかかりました。そんな中、調査区の際にわずかにかかっていた遺構が、鳥羽・伏見の戦いで焼けた土器や瓦、石製品、ガラス製品などを一括処分した土坑であることが分かり、すぐさま調査区を拡張して土坑の記録と遺物採取に努めました。遺物採取は、調査区の埋め戻し作業が進むなかり、調査地引き渡しの当日昼まで粘り強く行いました。大変苦労はしましたが、この作業を行った結果、持って帰った土器の中から「八太」と書かれた磁器を見つけ出すことができました。考古学の成果によって、居住者が判明した瞬間です。史料が豊富に残る京都での遺跡調査の楽しさと、粘り強くデータを収集することの大切さを知ることができました。

地域住民の方々と 調査中や調査後には、地域住民の方々(とくに稲葉神社崇敬会や淀温故会、淀藩士の末裔の方々)に、淀地域の歴史について多くのことを教えていただきました。また、淀地域での講演の機会もいただき、調査成果について広く知っていただくことができました。京都には、地元の歴史に誇りをもっておられる方が多くおられ、そうした環境の有難さを痛感することができた調査でもありました。

なかでも思い出深いのは、報告書刊行後のことです。調査地の家老屋敷の居住者である八太監物の末裔の方が、弊所に電話を下されたことです。八太家は鳥羽・伏見の戦い後に淀を離れており、末裔の方も現在は淀から遠く離れた地域に住まわれているのですが、発掘調査の新聞記事をたまたまで見つけてくださったのです。この交流を通じて、末裔の方からはご先祖様の八太監物にまつわる思い出や、八太家の歴史について教えていただくことができました。また、弊所から報告書数部をお送りさせていただいたところ、八太家の歴史を知ることができる本として大変喜んでいただけました。後日聞いた話では、報告書は、末裔の方を通じていくつかの親戚筋にも送付されたようですが、これをきっかけに、最近疎遠になっていた親戚と話すことが出来たとも、末裔の方は喜んでおられました。歴史がもつパワーを垣間見たような気がします。

おわりに 私は淀城跡の調査を通じて、京都の遺跡調査の楽しさ、粘り強くデータを収集することの大切さ、地元住民の方々に歴史に興味をもっていただけていることの有難さを知ることができました。こうしたことを忘れず、今後も発掘調査を続けていきたいと思えます。

主要参考文献:

谷川俊太郎編1997「母の恋文」新潮社
中谷俊哉2022「長岡京跡・淀城跡」京都府埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-14 公益財団法人京都府埋蔵文化財研究所
中谷俊哉2025「淀城跡」『近世城郭の考古学』高志書院

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山崎公輔さんです。



▲家老八太三左衛門屋敷の式台と玄関(江戸時代中期)

考古者の書棚

「虫塚紀行」

柏田雄三 著／創森社(2016)

村山 卓

ネットを介して本を探すことが容易になった昨今、キーワード検索によって思わぬ本に遭遇する機会も増えた。ここに紹介する「虫塚紀行」も小さな好奇心から手に取った一冊である。

きっかけは仕事であった。私は昨年度から今年度にかけて、埼玉県鶴ヶ島市で遺跡の調査に携わる機会を得た。市街地からさほど離れた場所ではないのだが、雑木林に武蔵野の面影が残る自然豊かな調査現場であった。調査準備中に2頭のイノシシが侵入してきたのには驚かされたが、普段はカワセミの声が響き、シートの下で野ネズミが子育てをする里山の環境である。

発掘調査範囲の一角には「虫塚」という塚があった。遺跡地図では「古墳」という扱いであったけど、このあたりには中近世の塚状遺構が多い。虫塚もそういった類いの塚であろう。既に墳丘はほとんど残っていなかったが、少し前まで僅かな高まりが残存していたらしい。発掘の結果、数カ所に裾部らしい立ち上がりを確認し、比較的大きな塚がここにあったものと推察された。調査の内容は報告書をもって公になるであろうが、私としては「虫塚」という名前の由来が気になった。

「虫塚」の名前は「藪になっていて虫が多い」あるいは「虫の巣になっている」程度の意味かもしれない。この場合、「蛇塚」「貉塚」などと同じようなネーミングである。しかし、虫供養の塚を「虫塚」と呼ぶ事例があるから、その可能性もあるだろう。

この頃、縁あって福井県でも「虫塚」を調査する機会があった。小浜市甲ヶ崎円明寺のご住職の案内を得たもので、寺の裏山にあったのは江戸時代の「善徳虫供養塔」である。善徳虫はカメムシの一種で稲の害虫なのだという。こちらはマウンドではなく方柱形の石碑であった。偶然にも、異なる地域で異なる形状の虫塚に携わり、「虫塚」の正体について少しずつ考えるようになった。

「虫塚」としては、医学者で昆虫にも詳しい養老孟司さんが建長寺(神奈川県鎌倉市)に建てたものが有名である。ゾウリムシを象ったモニュメントで、設計は建築士の隈研吾さんだという。はたして全国にはどのような虫塚があるのだろうか、と思いネットで検索してみたら、すぐに『虫塚紀行』がヒットした。内容もよく分からないまま注文したのが本書である。気負わない内容でありながら、前近代の生活が自然とともにあったことを再認識させてくれる。歴史・文化財関係者にもお薦めしたい。

前置きが長くなったが、本の内容について紹介しよう。本書はタイトルのおり、全国にある「虫塚」を紹介する本である。各対象物については1~3頁程の平易な文章でまとめられている。写真と所在地・アクセス情報も添えられており、実際に訪ねて歩くことを意識した構成となっている。私が興味をもったような「虫供養」以外にも、益虫を称え感謝を表わす碑、特殊な昆虫の発見地などを記念する碑、さらには昆虫に関わる歌碑ま

で採録される。虫に関わる様々なモニュメントを集めた、総合的な「虫の碑文」案内書として編まれているのが面白い。本文240頁ほどのコンパクトな本だが、掲載場所は北海道から沖縄県まで100ヶ所を超える。建碑の時代は問わず、主に近世の供養塔から現代の虫供養塚などが収録される。もちろん、先に触れた鎌倉建長寺の「虫塚」も載っている。

このような本を書いた柏田雄三氏がどのような人物かにも興味が湧く。略歴の肩書きは「虫塚研究家、昆虫芸術研究家」である。東京大学農学部卒業後、武田薬品工業株式会社アグロカンパニーで農業に関する業務に携わり、後に住化タケダ園芸株式会社代表取締役社長、アース製薬株式会社顧問を歴任とある。「おわりに」には「童謡の歌碑に合わせて、いろいろな石碑の写真を撮りはじめたのは数年前のことである。虫塚もそのうちの一つになった」と記される。もともとは昆虫に関わる歌碑・句碑類から「虫塚研究」の道に入ったようだ。

本書に昆虫に関する知識が随所に生かされているのは、筆者の略歴を踏まえれば納得がいくであろう。なかでも虫供養碑などを収録した第1部の記述では、昆虫と人間との関わりを重視した解説文に特徴がある。本書を冒頭から読んでみよう。北海道や小笠原で明治時代以降に頻発したバッタの害、養蜂や果樹の授粉に感謝するハチの記念碑、薬となったヘビトンボの幼虫、農業試験場で犠牲になった虫供養碑、養蚕の歴史を伝える蚕の供養碑、江戸時代の稲作を害したカメムシやウンカの供養塔、外来昆虫駆除の歴史を伝える奄美・沖縄のミバエ根絶記念碑等々…。昆虫を通して、農業史を垣間見させる挿話が興味深い。著者が示したこれらの石碑・供養塔は、紛れもなく農業遺産的な文化財であり、近世・近代・現代の農業と昆虫の関係を伝える貴重な「いしづみ」である。

第2部は、昆虫に関わる歌碑・句碑を収録したものだが、一転して文学的な要素を含む解説文である。第1部ではあまり登場しなかった蜻蛉、蝶、螢などが登場し、特に「赤とんぼ」に関わる碑が多い。第1部・第2部ともに昆虫を題材とした石塔・石碑を対象にしつつも、各々に異なった眼差しを向けているのも本書の魅力の一つである。

筆者は「おわりに」の中で「飽食の時代には忘れられてしまいがちだが、虫の害におののきながら虫塚を建てその前で祈った先人達の強い思いを忘れてはなるまい」と記す。さりげなく書かれたこの一文には、たいへんな重みを感じる。あまりにも「過去」と乖離した感覚を持つようになった「現代人」は、どのように歴史研究に望むべきであろうか。様々な契機で建立された「虫塚」の中にそのヒントを探すのも良いかもしれない。

アルカ通信 No.271

発行日	2026年4月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp